

家族経営の典型的な日本式ゲストハウスは、民宿として知られており、低予算で伝統的なおもてなしを体験するには格好の方法です。通常、村で見かける民宿は、たいてい民家の空き部屋を利用しています。このような宿の提供の仕方は、20 世紀の前半に細野（現在の白馬八方尾根）で始まり、この村の登山の歴史と深く関わっています。

江戸時代（1603～1867 年）の終わりまで、八方尾根の白馬山脈は神聖な場所と考えられ、登ることなど論外でした。19 世紀末の明治維新の後、規制が緩和され、白馬岳とその周囲にそびえる峰々はようやく測量され、その後、地質学者や植物学者、有名な登山家など多くの人々が訪れました。その一人がイギリス人の牧師で登山家のウォルター・ウェストンでした。「日本の登山の父」とされる彼は、1894 年に白馬岳を征服し、その印象を著書「日本アルプスの登山と探検」（1896 年）に表しました。1913 年に白馬岳の 5 万分の 1 地形図が発行され、3 年後に信濃鉄道が開通して、東京から直に訪れることができるようになり、この山岳地域はますます登山家の間で人気が高まりました。

登山家たちは夜は旅館（一般的な日本の宿）ではなく、ガイドの家に泊まることもできるようになりました。1937 年に細野の地元ガイドの家 16 軒が旅行者に宿泊所を提供する許可を得て、これが民宿の始まりとなりました。この地域は太平洋戦争の数年後の 1948 年に急速にスキー・山岳リゾートに発展し、およそ 10 年後には 295 軒の民宿が 1 万 3 千人の宿泊客に宿を提供しました。